

年月日

22 06 02

ページ

21

N.O.

牛ふんで循環型農業

埼玉工大 など エネ地産地消の一助に

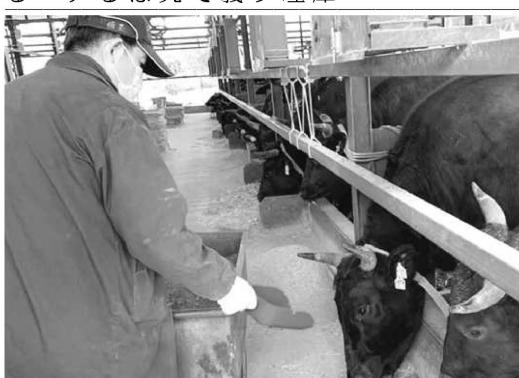
【さいたま】埼玉工業大学は尾熊牧場（埼玉県深谷市）グループらと連携し、牛ふんを活用した深谷市内での循環型農業の実現を目指し共同研究に乗り出す。牛ふん成分を分析し堆肥製造の最適化や臭気対策につなげるほか、発電エネルギーを生産・貯蔵し有効活用する。ロシアのウクライナ侵攻で資源価格高騰が懸念される。エネルギーの地産地消の動きが高まる中、その一助とする狙いもありそうだ。

埼玉工大工学部生命環境学科の本郷照久教授が、尾熊牧場グル

携。埼玉県信用金庫（熊谷市、池田啓一理事長）ときいしんコラボ産学者（同：橋本義昭代表理事）の仲介で実現し、1日に共同研究契約を結んだ。5社は循環型農業を推進する深谷企業コンソーシアムとして活動する。尾熊牧場で飼育する

家畜約3300頭の牛ふんを活用する。まず酸、カリウムの含有量分析し、チッソ、リンとして栽培品目に適した

堆肥を製造できるよう堆肥の提案につなげて、農家への最適化を実現する。堆肥はすぐに尾熊牧場グループで販売しているが成分分析は未着手とい。並行で悪臭が課題となっている牛ふんの臭気成分も分析。臭気軽減は効果的な吸着剤を農業廃棄物



尾熊牧場で飼育している家畜（埼玉工大提供）

手法を確立。成分調整して栽培品目に適した将来的にはエネルギーとしての発電蓄電を観据え、それを燃料に発電する。牛ふん発酵によりメタンガスを発生させ、それを燃料に発電する。埼玉工大のノウハウで蓄電し、ビニールハウスで使われる発調や照明への電気エネルギーとしての活用を目指す。